

藤原教長の書写意識

—— 仮名の書写における親本への姿勢 ——

家 入 博 徳

はじめに

書写は元となる親本を書き写す行為である。では、書くことに対して意識的であった人物は、書写をどのように行っていたのであろうか。

書写には書写者独自の書き方が表れる。一方、書写において親本をどのように書き写すかは問題となるであろう。親本の表記の影響や書写者の親本に対する意識等も書写には反映されていると考えられる。

そこで、本論では、書論を著した藤原教長の仮名自筆資料を取り上げ、その書写実態の分析から教長の仮名の書写における意識について考察することにする。

書論とは、「書についてのすべて、筆法、書式、能書、芸術論から文房四宝に至るまで広範な内容を論じたもの。」^(注1)で

あり、それを著した人物の書写には、当時の仮名の書写に対する意識を解明する手掛かりがあるものと考ええる。

一 藤原教長と書

教長は平安末期の人物である。歌人、能書として当時より著名であり^(注2)、歌集『貧道集』や歌論『古今集注』、『拾遺集注』(散逸)、書論『才葉抄』を著している。『今鏡』『みづぐき』に^(注3)

四條の民部卿の御こは。また俊明の大納言の御むすめのはらに。宰相の中將教長ときこえ給ひし。後には左京のかみになりて。讃岐院のこと々もおはしまし、に。かしらをろしたまひて。ひたちのうきしまとかにながされ給へりし。返のぼり給て高野にすみ給ときこえ給。わか道のにすぐれ

てをはするなるべし。てかきにもはすとぞ。処々のがくなどもかき給なり。

とあり、当時の「わかのみちにすぐれ」た歌人であると同時に、能書として著名な人物であったことが分かる。

教長の書の研究については、古くは伊藤壽一が「藤原教長の筆蹟に就いて―今城切を中心として―」（『畫説』第三十二号 岩波書店 昭和十四年）によって、従来伝藤原雅経筆とされてきた『今城切本古今和歌集』（以後、『今城切』）を教長筆であることを証明し、小松茂美『後撰和歌集 校本と研究』（誠信書房 昭和三十六年）の筆跡考証により、『二荒山本後撰和歌集』（以後、『二荒山本』）が教長筆であることが明らかとなる等、筆跡の研究が進められてきた。また、書論については多賀宗牟が『鎌倉時代の思想と文化』（目黒書店 昭和二十一年）において、教長の功績および『才葉抄』の考察を行ったことをはじめとして、多くの先達によって考察が行われてきた。教長は『才葉抄』の中で書の作法や手本に対する向き合い方、書くことに対する心得等を述べている。ただし、『才葉抄』で述べる書の作法に関しては、漢字を書く際のものであり、仮名を書く際の書式や作法等に関してはない。

このように、仮名を書く際の書式や作法の記述は『才葉抄』

にはないものの、『才葉抄』には「広く夜鶴庭訓といふ書にみえたり」、「夜鶴に次第見えたり」、「委夜鶴に見えたり」と、仮名の書写に関する記述がある書論『夜鶴庭訓抄』を読んでいる形跡が見られる。さらに、教長は守覚法親王に『古今和歌集』を献呈し（現在、その献呈した本が『今城切』と考えられている）^{（注5）}、講義をしていることを考えると、何かしらの規範意識のもとに仮名を書写した可能性が考えられる。

二 本稿における教長の自筆資料について

教長の筆跡については先達によって研究されてきており、今日、『今城切』や『二荒山本』は教長の自筆とされている。したがって、本論における教長の自筆資料として『今城切』、『二荒山本』を用い、分析・考察を行うこととする。『今城切』は『日本名跡叢刊』九四（二玄社 昭和六十年）および『古筆学大成』三（講談社 平成元年）、『二荒山本』は『日本名跡叢刊』三九、四〇（二玄社 昭和五十五年）を用い、掲載されている全和歌を対象とした（『今城切』二〇七首、『二荒山本』六六〇首、計八六七首）^{（注6）}。

本節では、主に異体仮名の使用実態を見てみることにする

【表1】。【表1】では、個々の異体仮名の種類と使用実態を示した。異体仮名全体のコサイン類似度を計算すると、0.981^①であった^(注6)。したがって、類似性が高いと言える。一方、『お』、『ひ』については、他の文字に比べると個々の異体仮名の使用傾向が異なる。

そこで、いくつかの分析方法によってその使用実態を見てみることにする。初めに、行頭における使用実態を見てみることにする。

〈行頭における異体仮名の使用実態〉

《お》

『今城切』

「お」 一例

「於」 二十例

『二荒山本』

「お」 二十六例

「於」 三十二例

《ひ》

『今城切』

「ひ」 十五例

「目」 使用例なし

『二荒山本』

「飛」 四例

「ひ」 三例

「目」 使用例なし

「飛」 四十四例

この結果から、『お』については、二つの本でどちらも「於」の使用が多い傾向にある点では一致するが、『今城切』ではほぼ「於」が行頭専用として使用されている。一方、『二荒山本』では「お」の使用も多く、使用方法が同じであるとは言えない。『ひ』については、『今城切』では「ひ」の使用が一番多いのに対し、『二荒山本』では「飛」がほぼ行頭専用として使用されているという違いが見られた。

次に、各行の Digram を集計し、『お』、『ひ』の上接、下接それぞれの異体仮名の接続実態について、使用数が多いもの『お』は『おも』・『とお』、『ひ』は『ひと』・『こひ』^(注7)を取り上げて分析してみたところ、以下の二つの傾向が見られた。(上接、下接における異体仮名の接続実態)

① 二つの本で同じ傾向を示すもの

《おも》

『今城切』 「お」 + 「も」 十三例

『二荒山本』

「お」＋「毛」 九例
「於」＋「も」 七例
「於」＋「毛」 二十六例
「於」＋「裳」 使用例なし
「お」＋「も」 十一例
「お」＋「毛」 四十四例
「於」＋「も」 十六例
「於」＋「毛」 六十四例
「於」＋「裳」 一例

《とお》

『今城切』

「と」＋「お」 四例
「と」＋「於」 十例
「と」＋「お」 十一例
「と」＋「於」 二十二例

《こひ》

『今城切』

「こ」＋「ひ」 十八例
「こ」＋「日」 二例
「こ」＋「飛」 使用例なし
「古」＋「ひ」 使用例なし
「古」＋「日」 三例

『二荒山本』

「古」＋「飛」 使用例なし
「こ」＋「ひ」 四十二例
「こ」＋「日」 使用例なし
「こ」＋「飛」 一例
「古」＋「ひ」 使用例なし
「古」＋「日」 使用例なし
「古」＋「飛」 二例

② 二つの本で異なった傾向を示すもの

《ひと》

『今城切』

「ひ」＋「と」 五十五例
「日」＋「と」 一例
「飛」＋「と」 五例
『二荒山本』
「ひ」＋「と」 二十三例
「日」＋「と」 使用例なし
「飛」＋「と」 百十三例

以上のように同じ異体仮名であっても、接続する文字によって傾向が異なっている。

同一人物による書写であり、コサイン類似度も高い場合であっても、詳細に分析すると、ごく一部に書写本により異なった異体仮名の使用傾向を示すものがあった。この結果から以下

のことが考えられる。

一つは、教長が用いた『今城切』、『二荒山本』の親本の書写者が同じで、教長が異体仮名をそのまま書写した可能性、もう一つは、教長が独自の異体仮名使用方法で書写した可能性である。『今城切』の由来が明らかとなった資料である『諸雜記』に「貫之妻手跡云、」とあることから、『今城切』は「貫之妻」によって書写されたものを親本としていたことが分かる。したがって、貫之死後に編纂された後撰集の書写本である『二荒山本』と同じ書写者であると言うことは難しい。もう一つについては、一部に異同が見られるものの、全体的な使用傾向は同じである。使用傾向に違いが見られた《お》、《ひ》については、親本の影響や書写年代等による教長自身の使用方法の変化によるものと言うことができる。

三 教長の親本に対する姿勢

書写をする場合、元となる本、つまり親本をどのように書き写すのが問題となる。親本を複写するかの如くに書写することもあれば、あえて親本は仮名であった箇所を漢字にしたり、その逆に漢字を仮名にしたりすることもある。

では、教長はどのような意識のもとに親本を書写したのであろうか。

藤原定家著『顯註密勘』に^(注8)、

抑崇徳院に貫之自筆本と申古今侍けり。教長卿、亡父五条三品禪門清輔朝臣各申うけて書うつしけるを、宰相は真名仮名の字をも一字たがへず、そのつかへる文字をか、れ侍けり。是はたゞ真名は真名、仮名は仮名に書写。但此本當時所見不審甚多。

とある。教長は、真名（漢字）と仮名の書き分けを親本通りするとともに、「そのつかへる文字」を親本通り書いていたと記されている^(注9)。『顯註密勘』の記述をそのまま受け取れば、教長はまさに親本を複写しているのである。ただし、前節で考察したように、「そのつかへる文字」に異体仮名までを含め、親本と同じように書写したとは考えられない。

教長は崇徳院所持の「貫之自筆本」の古今集を目の前にし、貴重であり書写しようと考えた。その際、定家が「但此本當時所見不審甚多。」と考えた本文をも、教長は親本の通り書写した。教長は「古今集註」を著すほどの人物である。定家にとつて「不審」と思われる本文を教長はそのまま書写したからこそ、定家は『顯註密勘』に「そのつかへる文字をか、れ侍けり」

と記したのではないだろうか。

では、実際の書写本はどのように書写されているのであろうか。まず、書論書や歌論書で書写の書式に言及のある「題知らず よみ人知らず」の書写に着目する。

書論書である『夜鶴庭訓抄』^{〔注10〕}には、

それにとりて、三代集を書くに口伝候。三代集と申すは三代の御門の我も我もと選ばれたるを申すなり。古今・後撰・拾遺なり。三の物を取り合はせて三代集とは申すなり。それが題不知、読人不知など申すにさまざまにかへられたるなり。古今には題不知・読人不知・後撰には題不知・読人も、拾遺には題・読人不知と候べし。

とある。古今集では「題不知・読人不知」と書写し、後撰集では「題不知・読人も」、拾遺集では「題・読人不知」と歌集ごとに分けて書くことが口伝として伝えられていることを述べている。次に、歌論書を見てみると、

『袋草紙』^{〔注11〕}

古今には「題知らず、読人知らず」、後撰には「題知らず、読人も」、拾遺は「題、読人知らず」、かくの如くこれを書く。然して末代の本必ずしも分別せず。これ転々書写の失か。

『八雲御抄』^{〔注12〕}

古今 題不知、読人不知書。

後撰 題不知よみ人も^{トカケリ}。

『古来風体抄』^{〔注13〕}

まことやいづれのころよりたれがいひそめける事にか、後撰には、題知らず、よみ人もとかき、拾遺には、だいよみ人しらずとかくなりと、ちかき世の故人など申とき、て、そのかみはさやうにもかき侍りしを、なをふるき本どもたづねみはべりしかば、さまざまにかきたるさま、

と、古今集では「題知らず、読人知らず」と書写し、後撰集では「題知らず、読人も」、拾遺集では「題、読人知らず」と『夜鶴庭訓抄』と同様に書写することとしている。

『今城切』は古今集、『二荒山本』は後撰集を書写しているのであるが、それぞれの書写実態を調査してみると、以下の結果となった。

『今城切』 六／六例

たいしらす よみひとしらす

『二荒山本』 二十一／二十一例

たいよみひとしらす

このことから、まず、すべての例が仮名で書写されているこ

とが分かる。次に、『今城切』は前掲の書論書、歌論書と同様の語句が書かれているが、『二荒山本』は異なっている。『二荒山本』の場合、前掲書の拾遺集の語句なのである。教長が『顕註密勘』で述べられているような書写を『二荒山本』においても行っていたと考えるならば、当時あまり証本と考えられていなかった本を親本として書写した可能性がある。『二荒山本』の本文系統は清輔本系統に属しているものの、独自異文も多々ある。さらに、前掲の『袋草紙』では「然して末代の本必ずしも分別せず。これ転々書写の失か。」と述べ、『古来風体抄』では「なをふるき本どもたづねはべりしかば、さまざまにかきたるさま」と述べるように、多くの書式があった。『夜鶴庭訓抄』を読んでいる教長であれば、前掲の書論書や歌論書のように書き換えることもできたであろうが、当時あまり証本と考えられていなかった本を貴重であると考え親本として書写し、異体仮名の書き分けは別として、その語句をどのような本文であつても一字も違えず書写したのではないだろうか。それが現存する『二荒山本』ではないだろうか。

四 漢字使用の実態

教長の漢字使用について見てみることにする。以下、『今城切』、『二荒山本』における漢字の使用実態を挙げることにする。

『今城切』

「日」 三例

「見」 一例

『二荒山本』

「日」 十二例

「人」 二例

「身」 一例

いずれの本も漢字の種類、使用数ともに少ないことが分かる。

教長以前に書写されたものとして『高野切本古今和歌集』（以後、『高野切』）の漢字の使用実態について見てみる。なお、『高野切』は第一種から第三種の三人の書写者によって書写されていることから、それぞれの漢字の使用実態を挙げることにする。『高野切』は、『日本名筆選』（二玄社 平成五年）を用い、掲載されている全和歌を対象とした（第一種六五首、第二種二二八首、第三種五五首、計二四八首）。

第一種

〔日〕 一例

〔花〕 二例

〔見〕 一例

第二種

〔花〕 二例

第三種

〔世〕 一例

〔中〕 一例

歌数は書写者によつて異なるものの、教長同様全体的に種類、使用数ともに少ないと言える。ちなみに、教長以降の人物である定家の書写とされる『嘉禄二年本古今和歌集』の最初の歌を見てみても^{〔注1〕}、

年の内に春はきにけりひと、せをこそとやいはむことしとやいはむ

と、一首だけで三種類の漢字を使用している。

このような漢字使用の違いの理由の一つとして、教長や『高野切』といった定家以前のものと定家以降のものといった時代による漢字使用の意識の違いが考えられる。定家は『下官集』

「書歌事」^{〔注2〕}に、

知物様之人称故実態以上句之末

下句之行之上に書

さくらちるこのしたかせは さむか

らてそらにしらぬゆきそふりける

如レ此書、雖レ有レ其説「當時至レ愚之性」迷。

而不レ弁「上下句」。只付「読安」可レ用「左説」。

さくらちるこのした風はさむからて

そらにしらぬゆきそふりける

真名を書交字或ハ落字之時。

上句一行にたらずなれとも只如「闕字」。

其所を置て次の行に可レ書「下句」之由洪レ之。

とある。ここでは、主として和歌を二行で書く際に、上句と下句で分けて書くことを読みやすいことを述べている。同時に、和歌の箇所を見ると修正前は「かせ」を仮名で書いているが、修正後は「風」と漢字で書いている。漢字によつて一行当たりの文字数を減らし、上句を一行で書ききることができるようになることを示している。和歌は漢字で表記することで語句の意味が一つに固定されてしまうのを避けるように、仮名で書写されてきたと考えられるので、定家は一行で上句を書ききることを優先し、読みやすさを求めたのであろう。また、勅撰集の注釈が盛んに行われるようになり、漢字を使用することにより語の意

味を固定する意図があつたのかもしれない。

『顕註密勘』にあるように、教長は親本の「そのつかへる文字」を書写した。このような教長の書写態度の要因として、親本の由来が正当なものと考えた場合は、どのような本文であっても親本通りに書写を行つていたのではないだろうか。『二荒山本』の由来については、現在のところ不明であるが、『今城切』については、『諸雜記』に、

治承元年八月十九日書写了。此本花園左大臣有仁相伝、秘藏深納箱底、貫之妻手跡云、。貫之取捨之、歌傍有直付事等、是多貫之自筆也。讃岐院在位御時、借召之。観蓮在俗為近臣。申請所書写也。歌数相諧、序詞尤足為証本而已。

釈観蓮

と、親本の由来の正当性を教長自身が述べているのである。このように、本の由来に正当性が認められたものに関しては、それをななるべくそのままの形で保存しようとしていたのかもしれない。

五行への意識

『今城切』、『二荒山本』はいずれも二行書きであるが^{注16}、

上句、下句の区切れで全ての歌が改行されている。

先述したが、『才葉抄』には仮名を書く際における書式や作法等の記述は見られない。一方、教長が読んだと考えられる『夜鶴庭訓抄』には、和歌の書式に関する事柄が記されている。『夜鶴庭訓抄』「歌書事」には、

二行に書かせ給はば、五七五一行、七七一行に候べし。三行有るべきは、五七一行、五七一行、七一行に候べし。とてもかくても歌だに書き付けてうつくしうなど申すは、無下の事に候。

とある。『才葉抄』は伊行の子孫である藤原伊経に対して行つた書の口伝を著したものであるから、『夜鶴庭訓抄』を意識し、書写にその考えを取り入れた可能性は十分考えられる。教長は『顕註密勘』に「宰相は真名仮名の字をも一字たがへず、そのつかへる文字をか、れ待けり。」とあるような書写をしているが、行に関する記述はない。

『下官集』「書歌事」に、「知物様之人称故実態以上句之末下句之行之上に書」とあるように、上句、下句の区切れで改行することは、定家以前では一般的ではなかった。実際、『高野切』においても、上句、下句の区切れを意識して書写していると考えられる書写者であっても、全ての歌で上句、下句の区切れで

改行している書写者はいなかった（注17）。

以上のことから、教長が親本とした本は全ての歌を上句、下句に区切って書写したものであった可能性は低いのではないだろうか。だとすると、教長自身の考えによつて上句、下句の区切れて書写していると考えられる。

なお、上句、下句を句ごとに二行で書き分けられるのが一般化する時期について、佐々木孝浩氏は先行研究を検討したうえで「平安末から鎌倉初期に掛けて徐々に変化していったものであろう。」（注18）と述べられるように、徐々に上句、下句を分かりやすく書き分けるようになったと考えるのが妥当であろう。その背景には、伊行や定家といった勅撰集の編纂や書写に関わり、さらに仮名の書式についても言及する人物、つまり書くことに対して意識的であった人物等の影響が考えられる。

おわりに

教長の仮名の書写に関しては、『顕註密勘』にあるように、基本的には親本を尊重した書写であることが考えられる。しかし、異体仮名や改行については教長独自のものであることから、すべてを親本通りに書写したのではないのであろう。改行

に関しては、上句、下句を区切る書写を徹底していることから、『才葉抄』には記載していないものの、仮名においても書写の規範意識の中で書写をしていたと考えられる。

注1 『日本書道辞典』二玄社 昭和六十二年

2 小松茂美『後撰和歌集 校本と研究』（誠信書房 昭和三十六年）の「藤原教長年譜」には教長の活動について詳細にまとめられている。

3 本文は『新訂増補国史大系』第二十一巻下（吉川弘文館 昭和四十年）より引用し、適宜傍線を付した。

4 京都大学附属図書館蔵『諸雑記』に、
治承元年八月十九日書写了。此本花園左大臣有仁相伝、秘蔵深納箱底、貫之妻手跡云、貫之取捨之、歌傍有直付事等、是多貫之自筆也。讚岐院在位御時、借召之。観蓮在俗為近臣。申請所書写也。歌数相諧、序詞尤足為証本而已。

积観蓮

比校又了。同年九月十二日於 禪定大王御前、始説申之。同廿四日終之。其間件集一千九十五首、悉以所伝之説、
払底聞食了。所謂讚岐院当帝之昔、法性寺入道以下公卿侍臣男女之歌仙各演其秘説、観蓮一度無漏其座。兼又往年謁

俊頼基俊、談宗延勝超探和歌之旨趣。而其議敢不廢忘。今遇此道之中興、於大王御前寫斯如瓶水悅哉。觀蓮空納胸中之著懷、已臨老後悉散之、且述鬱憤且蕩堅執、豈非菩提之要路乎。幸甚、。

とある傍線部と、『今城切』の奥書とが一致したことから、『今城切』が守覚法親王に献呈されたものであると考えられている。なお、『諸雜記』の本文は濱口博章『中世和歌の研究 資料と考証』（新典社 平成二年）より引用し、適宜傍線を付した。

5 『今城切』の歌の内、『古筆学大成』掲載の七五一番歌、九二二番歌は一行書きで小さく書き入れられているが、これが教長によつて書写されたものであるか否かについて判断できなかったため調査対象から除外した。

6 本来は1-1を取るが、文字数なのでマイナズ値がないため0-1を取る。なお、『二荒山本』を三分割（先頭から歌を二つ飛びで選んでいき一グループを作成し、第二グループは先頭から二つ目、第三グループは先頭から三つめをスタートとして分割）したものとコサイン類似度が0.988であった。

7 『おも』、『とお』、『ひと』に関しては、『今城切』、『二荒山本』

のそれぞれの本の内、最も接続数の多いものであるが、『こひ』は『二荒山本』では二番目に接続数が多いものである（一番は『もひ』）。しかし、『こひ』は『今城切』では最も接続数が多く、二つの本の合計においても最も接続数が多かったため、本考察では『こひ』を取り上げている。

8 本文は『日本歌学大系』別巻五（風間書房 昭和五十六年）より引用した。

9 「そのつかへる文字をか、れ侍けり」を、「仮名の字母づかいを保存するものであったという。」と解釈する考えもある。（浅田徹氏「不違一字」的書写態度について）『中世和歌 資料と論考』明治書院 平成四年）

10 本文は永由徳夫氏『夜鶴庭訓抄』の研究』（青山杉雨記念賞 第三回学術奨励論文選）平成十二年）より引用した。

11 本文は『新日本古典文学大系』二十九（岩波書店 平成七年）より引用した。

12 本文は『日本歌学大系』第三卷（風間書房 昭和三十一年）より引用した。

13 『日本歌学大系』第二卷（風間書房 昭和三十一年）より引用した。

- 14 本文は『冷泉家時雨亭叢書』第二卷（朝日新聞社 平成六年）より引用し、適宜傍線を付した。
- 15 本文は浅田徹氏「下官集の諸本」（『国文学研究資料館紀要』第二十六号 平成十二年）より引用し、適宜訓点、傍線を付した。
- 16 注5と同じ。
- 17 「高野切本古今和歌集」に見る平安時代表記の共時的規範意識」『研究と資料』第七十八輯 平成二十九年
- 18 「勅撰集の書式と表記の関係」『日本文学』六十三卷七号 平成二十六年

【表1】異体仮名の種類および使用実態

		二荒山本		今城切				二荒山本		今城切		
す	す	0.4%	(1)	0.0%	(0)	あ	あ	97.1%	(441)	97.6%	(120)	
	春	58.3%	(165)	47.7%	(42)		阿	0.4%	(2)	2.4%	(3)	
	須	41.0%	(116)	51.7%	(45)		悪	2.4%	(11)	0.0%	(0)	
	数	0.4%	(1)	0.0%	(0)		い	い	100.0%	(260)	100.0%	(118)
せ	せ	1.4%	(2)	7.0%	(3)	う	う	100.0%	(143)	100.0%	(52)	
	世	98.6%	(139)	93.0%	(40)	え	え	91.2%	(93)	91.7%	(22)	
そ	そ	100.0%	(336)	98.2%	(107)	江	江	8.8%	(9)	8.3%	(2)	
	所	0.0%	(0)	1.8%	(2)	お	お	52.0%	(132)	32.0%	(33)	
た	た	1.1%	(6)	6.5%	(12)		於	於	48.0%	(122)	67.6%	(69)
	多	98.1%	(517)	92.8%	(168)	か	か	9.8%	(107)	16.1%	(51)	
	堂	0.8%	(4)	0.5%	(1)		可	可	90.1%	(987)	83.5%	(264)
ち	ち	100.0%	(223)	100.0%	(55)		閑	閑	0.1%	(1)	0.3%	(1)
つ	つ	68.2%	(367)	73.3%	(96)	き	き	81.6%	(707)	88.4%	(190)	
	川	0.7%	(4)	0.8%	(1)		起	起	5.4%	(47)	1.4%	(3)
	徒	31.0%	(167)	26.0%	(34)		支	支	12.9%	(112)	10.2%	(22)
て	て	74.1%	(252)	81.5%	(88)	く	く	96.7%	(497)	96.6%	(142)	
	氏	25.9%	(88)	18.3%	(20)		具	具	3.3%	(17)	3.4%	(5)
と	と	99.9%	(837)	99.7%	(318)	け	け	0.0%	(0)	1.9%	(2)	
	東	0.1%	(1)	0.3%	(1)		介	介	96.3%	(339)	94.3%	(100)
な	な	47.7%	(467)	61.2%	(194)		希	希	3.7%	(13)	3.8%	(4)
	奈	28.4%	(278)	18.9%	(60)	こ	こ	97.1%	(499)	97.6%	(162)	
	那	24.0%	(235)	19.8%	(63)		古	古	2.9%	(15)	2.4%	(4)
に	に	19.0%	(134)	11.3%	(24)	さ	さ	99.3%	(290)	97.8%	(90)	
	耳	1.3%	(9)	0.9%	(2)		佐	佐	0.7%	(2)	2.2%	(2)
	二	0.3%	(2)	0.9%	(2)	し	し	92.4%	(678)	81.6%	(208)	
	尔	79.4%	(559)	86.4%	(185)		志	志	7.6%	(56)	18.4%	(47)
ぬ	ぬ	100.0%	(228)	100.0%	(81)							

		二荒山本		今城切	
も	も	29.3%	(206)	35.6%	(83)
	裳	0.1%	(1)	0.9%	(2)
	毛	70.6%	(497)	63.5%	(148)
や	や	99.7%	(306)	100.0%	(105)
	夜	0.3%	(1)	0.0%	(0)
ゆ	ゆ	100.0%	(206)	100.0%	(49)
よ	よ	100.0%	(211)	100.0%	(75)
ら	ら	100.0%	(523)	100.0%	(148)
り	り	8.5%	(45)	9.0%	(13)
	利	91.3%	(484)	91.0%	(131)
	里	0.2%	(1)	0.0%	()
る	る	97.6%	(643)	98.3%	(169)
	類	2.4%	(16)	1.7%	(3)
れ	れ	96.5%	(381)	95.3%	(163)
	礼	0.8%	(3)	0.0%	(0)
	連	2.8%	(11)	4.7%	(8)
ろ	ろ	99.5%	(191)	100.0%	(61)
	路	0.5%	(1)	0.0%	(0)
わ	わ	94.3%	(231)	98.9%	(91)
	王	5.7%	(14)	1.1%	(1)
ゐ	ゐ	100.0%	(28)	100.0%	(5)
ゑ	ゑ	100.0%	(59)	100.0%	(6)
を	を	97.3%	(327)	99.2%	(122)
	越	2.7%	(9)	0.8%	(1)
ん	ん	100.0%	(151)	100.0%	(54)

		二荒山本		今城切	
ね	ね	91.0%	(101)	82.8%	(24)
	年	9.0%	(10)	17.2%	(5)
の	の	86.9%	(888)	83.1%	(280)
	能	13.1%	(134)	16.8%	(57)
は	は	45.2%	(484)	39.5%	(120)
	ハ	4.4%	(47)	5.9%	(18)
	者	50.4%	(540)	54.6%	(166)
ひ	ひ	24.4%	(95)	60.5%	(101)
	日	15.2%	(59)	28.7%	(48)
	飛	60.4%	(235)	10.7%	(18)
ふ	ふ	89.8%	(327)	97.0%	(97)
	不	0.5%	(2)	0.0%	(0)
	布	9.6%	(35)	3.0%	(3)
へ	へ	100.0%	(235)	100.0%	(82)
ほ	ほ	86.4%	(133)	87.5%	(28)
	本	13.6%	(21)	12.5%	(4)
ま	ま	66.0%	(283)	55.1%	(86)
	万	34.0%	(146)	44.5%	(69)
み	み	78.2%	(487)	87.2%	(171)
	ミ	0.2%	(1)	0.0%	(0)
	見	19.1%	(119)	11.7%	(23)
	美	2.6%	(16)	1.0%	(2)
む	む	99.4%	(177)	100.0%	(46)
	無	0.6%	(1)	0.0%	(0)
め	め	99.3%	(145)	98.3%	(59)
	免	0.7%	(1)	1.7%	(1)

凡例

使用割合をパーセントで示し、使用数をカッコ内に示している。